






幼児期における 自然体験活動の展開と 効果に関する研究

National Institution For Youth Education

令和2年度
調査研究
事業



中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立能登青少年交流の家
-  国立乗鞍青少年交流の家
-  国立妙高青少年自然の家
-  国立立山青少年自然の家
-  国立若狭湾青少年自然の家



National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

幼児期における自然体験活動について

国立青少年教育施設の中部・北陸ブロック（5施設）にて、平成30年度より3年間「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」を続けてきました。

各施設が、幼児を対象に地域の特質を活かしながら、様々な事業を展開してきました。

例えば、国立若狭湾青少年自然の家では「しぜんはともだち～海編～」を実施し、幼児の海での活動（磯遊びや磯観察等）を通して、運営手法や幼児の変容等について分析・考察を行っています。地域資源である「海」という大自然を舞台に、幼児の興味関心に即した遊びがダイナミックに展開されました。

幼児自身が自然の中で行動し、諸感覚をフルに発揮しながら、自らの興味関心に即して行動し、事象との関わりを深めていきます。

発見したこと、知り得たこと、出来たこと等がとても嬉しく、喜びを感じて更なる意欲が湧き出します。このような過程を通して、自己有能感が高まり、感性豊かに成長していくことと思います。

子供の頃の豊かな体験は、これから変化の激しい社会を生き抜くために必要な能力、「意欲」・「コミュニケーション力」・「へこたれない力」・「自己肯定感」が育まれます。

私たち、国立青少年教育振興機構は「体験活動を通じた青少年の自立」をスローガンに青少年の豊かな体験活動をこれからも推進していきます。

【中部・北陸ブロック次長プロジェクトについて】

青少年教育のナショナルセンターとして、全国の青少年教育施設の教育機能向上を目的に、平成19年度より中部・北陸地区の国立青少年教育施設（5施設）が連携し、先導的な調査研究や効果的な体験プログラムを開発するとともに、成果やデータを広く普及する活動を実施しています。



幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

目次

幼児期に育みたい「3つの柱」・「10の姿」と 幼小接続プログラムのポイント	3
国立能登青少年交流の家「親子でのとまり会」	5
国立乗鞍青少年交流の家「幼児と保護者の自然体験活動 ～1泊2日の宿泊を通して育まれる社会性に注目して～」	9
国立妙高青少年自然の家「森のほいくえん」	13
国立立山青少年自然の家 「幼児キャンプ やんちゃキッズの大冒険!!」	17
国立若狭湾青少年自然の家「しぜんはともだち—海編—」	21
事業を終えて	25
調査研究事業の概要	26

～「生きる力」につながる～

小学校以上

確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、
いかに社会が変化しようと、
自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え
主体的に判断し、行動し、
よりよく問題を解決する
資質や能力

生きる力

豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、
他人を思いやる心や
感動する心などの豊かな人間性

健康・体力

たくましく生きるための
健康や体力

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・人間性等

知識・技能の基礎

- ・基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
- ・身体感覚の育成
- ・様々な気づき、発見の喜び 等

遊びを通しての総合的な指導

思考力・判断力・表現力等の基礎

- ・試行錯誤、工夫
- ・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- ・言葉による表現、伝え合い
- ・自分なりの表現 等

学びに向かう力・人間性等

- ・思いやり ・自信 ・好奇心、探究心
- ・話し合い、目的の共有、協力
- ・色、形、音等の美しさや面白さに対する感覚 等

幼児教育・保育

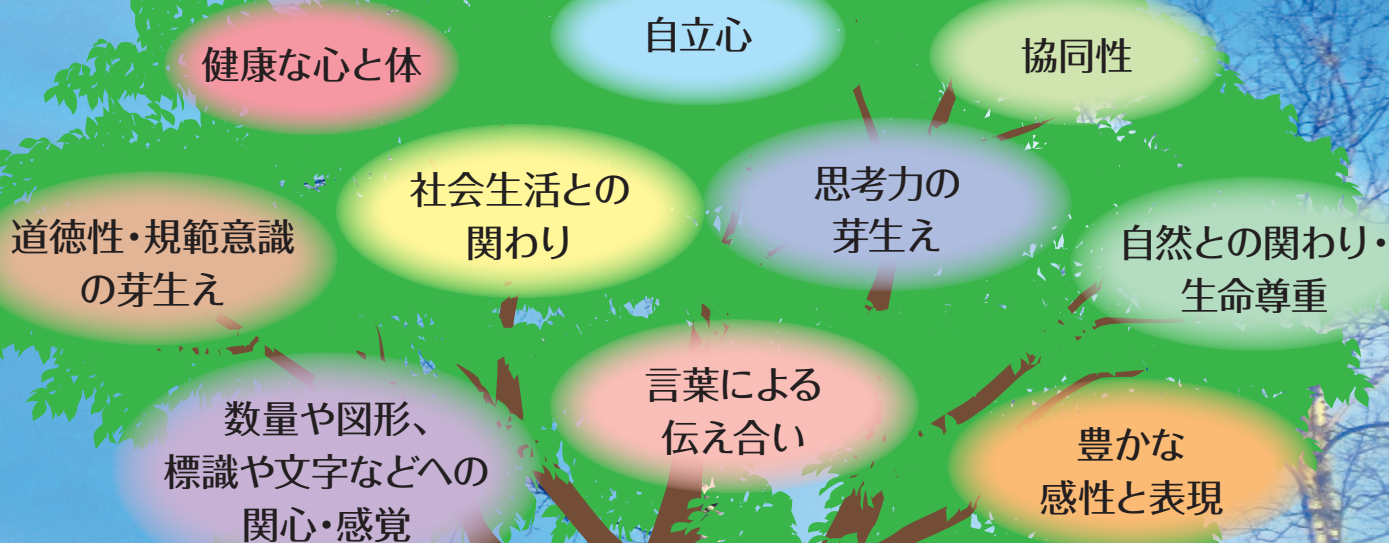
幼児教育・保育において育みたい「資質・能力」の“3つの柱”

幼稚園教育要領等(平成29年告示)で、幼児教育において育みたい「資質・能力」の柱として3つの要素が掲げられました。

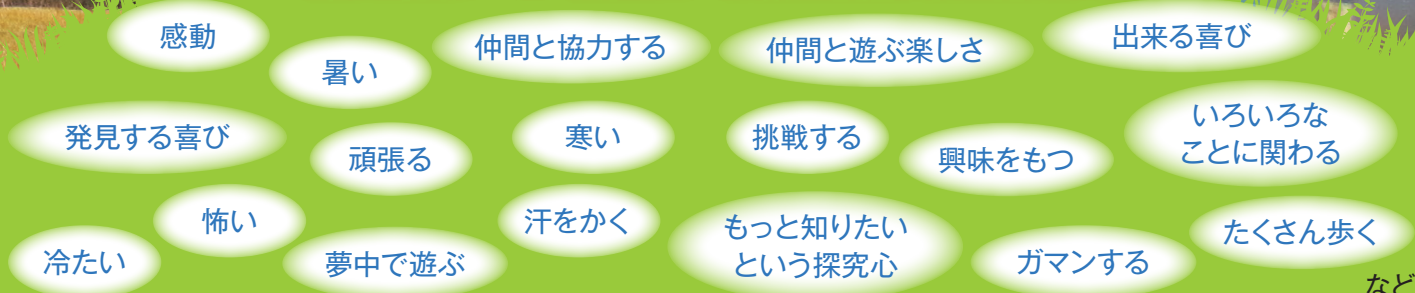
幼児期の終わりまでに育ってほしい“10の姿”

「資質・能力」を具体的に育てようとするときの注意点として表されたものが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい“10の姿”」です。これは、幼児期に完成を目指すということではなく、子供たちが歩み出している方向を表しています。

また、小学校入学後の指導に継続させていくことが小学校の学習指導要領にも明記されており、幼児期から小学校への接続がとても大切です。



— 幼児期にこそ豊かな自然体験活動を —



親子でのとまり会

1 事業の概要・目的

(1) 概要

ゆったりとした時間の中で、親子で自然体験活動や創作活動に取り組む。子供が自分でできることは自分でい、保護者は見守り、励まししながら活動を行う。子供にとっては心と体を働かせ、自信を持って行動し、豊かに思いを伝える機会となる。保護者にとっては、活動に取り組む子供の思いを受け取り、成長を感じる機会とする。あわせて、子育てについて学び、考える機会とする。

(2) 目的

自然体験活動や創作活動などに取り組むことにより、子供たちの「健康な心と体」、「自立心」、「言葉による豊かな伝え合い」の高まりを目指す。

(3) 対象

年長児・年中児とその保護者 1回目7家族 2回目6家族



2 活動内容

<第1回 令和2年8月30日(日)>

	9:30	10:00	12:10	13:00	15:00
受付	はじまりの会	<親子> 「親子で運動遊び」(体育館) 講師 富山福祉短期大学 准教授 小川 耕平 氏	昼食	<親子> 「森のレストラン」 (ふれあいの広場)	おわりの会



<第2回 令和2年9月5日(土)～6日(日)>

1日目		13:30	14:00	16:00	17:30	18:30	19:30	20:30
		受付	はじまりの会	<子供> 「砂像づくり」 <保護者> 情報交換会	テント設置 (親子)	夕食	「ナイトハイイク」 (親子)	入浴

2日目	6:30	7:40	8:30	9:30	11:30	13:30
	起床・洗面	朝食	テント片付け (親子)	<親子> 「森の洋服づくり」	<親子> 「カートドッグ作り」 子供は保護者のために、 保護者は子供のために作る	おわりの会



3 体験活動の展開とポイント

本事業を通して育みたい力を「健康な心と体」「自立心」「言葉による豊かな伝え合い」の3点とした。3つの力を高めるための活動を設定し、それぞれの力について各活動場面で「のとまり会で望む子供たちの具体的な姿」の例を設定した。はじまりの会で、保護者と事業のねらいを共有するために、3つの力や「子供たちの具体的な姿」について説明し、「子供を伸ばす言葉」を例示した。活動中は、できるだけ見守り、励ましの声かけをしてもらうよう共通理解を図った。また、ボランティアスタッフとも共通理解を図った。

健康な心と体

生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作り出すようになる。

自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、あきらめずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

言葉による豊かな伝え合い

大人や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

ポイント1 親子活動

子供たちが安心感を持って活動することができるように、親子で運動遊びや創作活動、テント設営などに取り組む。また、保護者には「子供を伸ばす言葉」を参考に、肯定的な声かけや安心感を与える声かけ、感謝の言葉を伝えてもらう。

ポイント2 振り返り活動

「言葉による豊かな伝え合い」をする場として各プログラムの終了時に振り返り活動を設定する。子供たちが、自然体験活動や創作活動で感じたことや考えたことを伝える際の支援として、「気持ちを表す言葉」、「様子を表す言葉」、「考え方を表す言葉」を例示する。子供たちがそれらの言葉を自分で選び、感じたことや考えたことを伝えるのは難しい場合には、保護者やスタッフがこれらの言葉を使って問い返すことで、子供たちにこれらの言葉の使用を促す。

親子での振り返り後、全体での振り返りの場面も設定する。活動ごとに繰り返し設定することで、初めは自分の思いを話せない子供も、人間関係に慣れ、他の子が話す姿を見てどのように話せばよいか分かり、勇気を出して話すことができると考えられる。全体の場で自分の思いを話すことにより、自信を持ち、達成感を得ることができる。

ポイント3 評価の工夫

子供たちが活動や基本的な生活に関することについて自己評価を行う「がんばったねカード」に取り組む。それぞれの活動後に、子供たちが自分自身で振り返り、できたこと、がんばったことを確認してシールを貼っていく。初めはシールを貼ることが目的である子供たちも、繰り返すことで、自分でできることは自分であることを目標にして活動に取り組めると考えられる。目標を持って活動し、活動後に自己評価を行い、自分の力でできたことを実感することで、自信が持てたり、達成感を感じたりすることができ、次への活動の意欲にもつながる。保護者にとっても、それぞれの活動での子供たちのがんばりや成長について一緒に実感することができる。

のとまり会で望む子供たちの具体的な姿

場面	健康な心と体	自立心	言葉による豊かな伝え合い
はじまりの挨拶の作法			怒を抑制しようとしている。感じたり、喜んだりしたことをいえる言葉を使って話している。
親子で運動遊び	楽しみながら運動している。	森の中から材料を取って、お弁当を作っている。	親子で話し合い、運動遊びをしている。
森のリストラン		森の中から材料を取って、お弁当を作っている。	
砂案づくり		自分がイメージするものを作っている。	
テント設営			親子で話し合い、テント設営をしている。
森の洋服づくり		森の中から材料を取って、洋服を作っている。	
カードブックづくり		ハジに野菜やインナーをはき、アムホイルに包んでいる。	
創作運動遊び	安全に気を付けて活動している。	自分でできることは自分でできぬことは助けを借りてしている。最後までやり遂げようとしている。	怒りを抑制しようとしている。
食事	食事の手に着いた油、髪を拭き出すに気づいている。	後片付けを自分でしている。	活動について話し合い、伝え合いを深めている。
お風呂		自分で歯を磨いたり、体を洗っている。	
トイレ		1人でトイレに行く。	

活動中に使ってほしい言葉

気持ちを表す言葉

○たのしい ○うれしい ○さわやか ○おちつく ○まんぞく ○きげんがいい ○きもちがいい ○ゆかい ○まちどおしい ○なつかしい ○きもちよく ○びびり ○うらやましい ○はんぱない ○まじよう ○しんぱい ○はらたつ ○かなしい ○すき ○きらい ○やりたない ○おももしろい ○おちこむ

様子を表す言葉

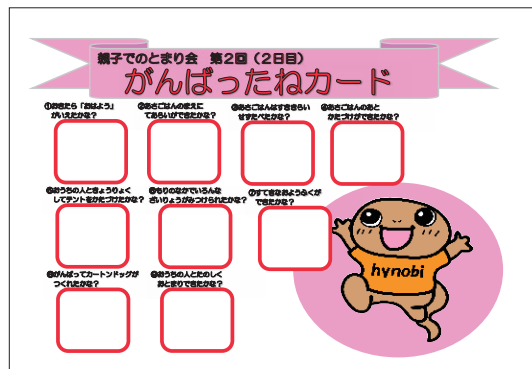
○おおい ○ちいさい ○あかるい ○くらくい ○わらわらい ○かたい ○かんたん ○むずかしい ○おおい ○すくない ○かわい ○かっこいい ○おもしろい ○はい ○おそい ○わいわい ○かかボカ ○ザーザー ○キラキラ ○チクタク ○つつつ ○ぞらぞら ○さらさら ○ふわふわ

考え方を表す言葉

○まるで〜のよう ○〜とおなじで ○〜とにている ○〜とちがって ○〜とちがくで

子供のほす言葉

○いいね ○丁寧だね ○やったね ○がんばっているね ○ありがとう ○〜ちゃんのおかげ ○勇気を出したね ○あわてなくてもいいよ ○大丈夫だよ ○さすが
(結果ではなく、がんばった過程をほめる)
(他の子の言葉が少なく、その子の言葉をほめる)
(自分の気持ちを表すイメージで伝える。例：私はずういい、私に助かる。)



4 調査結果・考察

(1) 保護者の見取り

事業前、1回目事業後、2回目事業後、事業終了1か月後にアンケート（5段階評価）と自由記述によって保護者により子供の変容の見取りを行った。のつまり会の1・2回目両方に参加した保護者（5名）を分析対象とした。

① 自作アンケート

実施時期：①事業前、②1回目事業後、③2回目事業後、④事業終了1か月後

5…よくできる 4…わりとできる 3…どちらとも言えない 2…あまりできない 1…できない

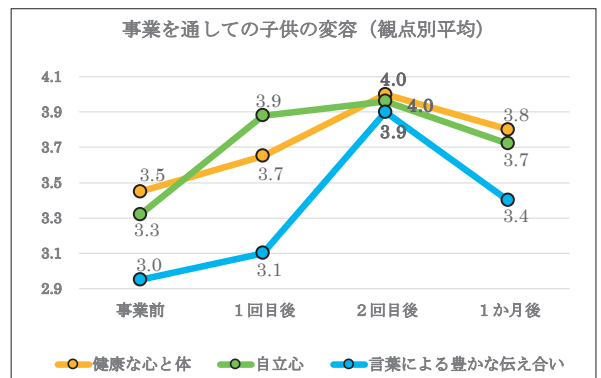
	観点	質問項目	質問項目別平均値				観点別平均値			
			①	②	③	④	①	②	③	④
1	健康な心と体	いろいろな活動や遊びにおいて、自分なりの目標をもって取り組もうとする。	3.2	3.6	4.0	4.0	3.5	3.7	4.0	3.8
2		いろいろな活動や遊びにおいて、見通しをもって進んで取り組もうとする。	3.2	3.4	4.0	3.8				
3		体を動かすことの気持ち良さを味わったり、場面にに応じて体の動きを調整したりすることができる。	3.8	4.0	4.0	4.0				
4		いろいろな活動や遊びにおいて、安全な行動の仕方が分かり、安全な行動をとっている。	3.6	3.6	4.0	3.4				
5	自立心	着替えや歯磨き、入浴など、身の回りのことで、自分でしなければならないことが分かり、自分で行おうとする。	3.8	4.2	4.4	3.8	3.3	3.9	4.0	3.7
6		自分でできないことは助けを借りて行おうとする。	3.8	3.8	4.4	4.2				
7		自分の力で最後までやりとげ、達成感を味わい、自信をもつことができる。	3.0	4.2	4.2	3.8				
8		少し難しいことでも自分の力でやってみよう、誰かに聞いてみたり、自分なりに工夫したりする。	2.8	3.6	3.2	3.4				
9		自分の生活をより良くするために、行動することができる。	3.2	3.6	3.6	3.4				
10	言葉による豊かな伝え合い	家族や身の回りの人にあいさつをしたり、「ありがとう」を言ったりすることができる。	3.4	3.0	4.2	3.4	3.0	3.1	3.9	3.4
11		感じたり、考えたりしたことをいろいろな言葉を使って、相手にわかるように話すことができる。	2.8	3.8	4.0	3.2				
12		相手の言いたいことを理解しようとする、聞くことができる。	2.4	2.8	3.2	2.8				
13		経験したことについて話し合い、伝え合いを楽しもうとする。	3.2	2.8	4.2	4.2				

2回目事業後までのアンケート結果では、本事業を通して育みたい力「健康な心と体」「自立心」「言葉による豊かな伝え合い」の全ての観点が平均値が上昇した。

「健康な心と体」については、「いろいろな活動や遊びにおいて、自分なりの目標をもって取り組もうとする。」「いろいろな活動や遊びにおいて、見通しをもって進んで取り組もうとする。」の項目が0.8ポイント上昇した。「親子で運動遊び」などの子供たちがやってみたくと思う活動の設定により、進んで取り組もうとする姿が見られたと考えられる。また、「がんばったねカード」の取組により、目標を持って活動することにつながったと考えられる。

「自立心」については、「自分の力で最後までやりとげ、達成感を味わい、自信をもつことができる。」の項目が1.2ポイントと上昇した。子供たちがやってみたく思うことに加え、がんばれば達成できそうな活動の設定や、余裕のある時間設定にすることで、子供たちが最後までやり遂げ、達成感を味わうことができたのではないかと考えられる。また、事業の説明時に、子供との関わり方について保護者と共通理解を図ったことで、保護者が手を出し過ぎず、励ましの声かけをたくさんしていたことも大きく影響していると考えられる。

「言葉による豊かな伝え合い」については、「感じたり、考えたりしたことをいろいろな言葉を使って、相手にわかるように話すことができる。」の項目が1.2ポイント、「経験したことについて話し合い、伝え合いを楽しもうとする。」の項目が1.0ポイント上昇した。これは、振り返り活動の設定や「活動中に使ってほしい言葉」の例示により、親子でのコミュニケーションが活性化したものと考えられる。また、保護者が子供たちの思いをしっかり聞くことで、子供たちが伝えることの楽しさを感じ、より思いを伝えようとしたと考えられる。





事業終了1か月後のアンケートでは、2回目事業終了後と比較するといずれの観点でも平均値が下がった。「自立心」については、事業中はがんばってしていたことも、日常生活に戻ったことで保護者に任せてしまうことが多くなったのではないかと考えられる。「言葉による豊かな伝え合い」については、時間的に余裕のあった事業での活動と比べ、日々の生活の中ではゆっくりと親子で対話する時間を持つことが難しいのではないかと考えられる。2回目事業後との比較では平均値が下がったが、事業前との比較ではいずれの観点でも平均値が上昇しており、本事業での成果があったと考える。

保護者の自由記述より一部抜粋

【2回目事業後】

- ・普段家の中で遊んでいるときにはできない深いコミュニケーションを子供とできたように思いました。
- ・絵も描き想像を膨らませてから集め、作るという流れで自然に子供が自主的に取り組みました。
- ・できるだけ自分でできるようにやってもらったらがんばってテントの設営や片付けをボランティアさんとやってくれた。
- ・なかなか夜のお散歩に連れ出す機会はないので、交流の家の敷地内で安心してハイキングができました。今まで見たことのない姿に驚きと喜びと…。自分で行動することができるんだと知ることができました。

【事業終了1か月後】

- ・忙しい毎日の中で、少しでも運動や手伝いをする機会を意識し声かけをすると快く応じ、自分から「自転車降りて歩いて帰ろう。」「ランニングに私も一緒に行きたい。」と言ってくれるようになりました。
- ・気持ちをしっかりと話せるようになりました。やる気にあふれる姿もあり、少し頼もしくなりました。
- ・夜、怖がらずに1人でトイレに行けるようになりました。事あるごとに、「交流の家に行ってきたから何でも1人で出来るよ!」と言うようになっています。

(2) ボランティアスタッフの見取り

今回の事業では、1家族につき1人のボランティアスタッフを配置し、本事業を通して育みたい3つの力について継続して見取りを行った。

ボランティアスタッフの自由記述より一部抜粋

- ・テントの設営、片付け、荷物運びを自分でやりたいと言い、できていた。
- ・森の洋服作りでは、作りながらどんどん新しい材料を取りに行き、考えていた。
- ・「ありがとう。」「手伝って。」「こうしてほしい。」など、自分の言葉でしっかりと伝えることができるようになっていく姿が見られて良かった。
- ・森のレストランでは、みんなの前で何を作ったのかを最初は話すことができなかったが、話しかけ、少し待つことで自分の言葉で伝えることができた。



5 成果・課題

(1) 成果

- ・事業を通して育みたい力や「のとまり会で望む子供たちの具体的な姿」については、保護者やボランティアスタッフと共通理解を図って子供たちと関わったことで、子供たちの成長した姿が多く見られ、アンケートでのポイントも上昇した。
- ・「がんばったねカード」の使用は、子供たちが目標を持って活動し、自己評価することを促し、活動の意欲が高まり、積極的に活動する姿につながった。
- ・事業全体を親子での活動としたことで、安心感を持って活動することができた。また、保護者が子供の変容をじっくり見取り、成長を感じることができた。講師の話や情報交換会から子育てについての情報を得ることができ、今後の子育てに活かしたいという保護者がいた。

(2) 課題

- ・安全管理の面から、子供同士が関わって活動することがあまりできなかった。相手の気持ちを考えて行動したり、分かりやすく伝えたりするなど、同年代の子供と関わることをとおした成長の場面を設定できなかった。保護者からは、子供だけで宿泊する事業の希望が多くあり、子供同士が関わって成長する活動を考えていく必要がある。
- ・事業終了後に日常生活に戻ると、できたことができなくなる場合があることが分かった。できたことが日常生活の中でも継続してできるように、子供たちへの情報の発信や、保護者への支援など、継続的な取組を考えていきたい。

幼児と保護者の自然体験活動

～1泊2日の宿泊を通して育まれる社会性に着目して～(わくわく!のり森ランド・子育てファミリーキャンプ)

1 事業の概要・目的

(1) 概要

家族(幼児とその保護者)を対象として、宿泊にて多様な自然体験活動を提供した。豊かな自然に触れること、親子で活動しじっくりと親子間のふれあいを持てること、集団生活の中で、規則を守り役割を果たすなど社会性を育むことを目的に実施した。

(2) 目的

- ①五感を使って乗鞍の自然に親しむ中で、体験活動の良さや魅力を存分に感じてもらえるよう努める(自然体験)
- ②日常を離れて家族でゆったりと過ごし、親子で向き合う(家族内交流)
- ③基本的な生活時間を守り、子供に役割を与えるなど、集団生活の中で社会性を育てる(集団生活)



(3) 対象

幼児とその保護者

【わくわく!のり森ランド】①7家族24名(内12名保護者)

【子育てファミリーキャンプ】①9家族34名(内15名保護者) ②9家族36名(内18名保護者)

③9家族37名(内18名保護者)



2 活動内容

【わくわく!のり森ランド】令和2年10月17日(土)～18日(日)(1泊2日)

1日目	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	18:00	19:00	20:00	21:00
	受付 はじめの会	ふれあい ゲーム	昼食	秋の森を 探検しよう		自由時間 食事・入浴			読み聞かせ<子供> 子育て座談会<保護者>	夜の森 探検	自由時間 就寝

2日目	6:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00
	起床・清掃 朝食・準備	クラフト活動 おやつを作ろう		昼食	ふりかえり	おわりの会 解散	



【子育てファミリーキャンプ】(3回共通)

①令和2年11月7日(土)～8日(日)(1泊2日) ②令和2年11月28日(土)～29日(日)(1泊2日) ③令和2年12月12日(土)～13日(日)(1泊2日)

1日目	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:15	20:15	21:00	22:00
	受付 はじめの会	自然散策 (こどもの森で遊ぼう)		施設紹介	夕食	入浴	火のつどい キャンドルサービス	自由時間 星空観察 (希望者のみ)	就寝

2日目	6:30	9:00	10:00	11:00
	起床・清掃 朝食・準備	クラフト活動 (松ぼっくりの クリスマスツリー など)		おわりの会 解散



3 体験活動の展開とポイント

自然体験



<五感や自然を使って、子供たちが遊びを想像・創造できる工夫>

葉っぱのしおり作りや木の実を用いたクラフトなど、自然にあるものを活用して自然への興味を引き立てる活動を行った。子供たちの興味・関心を引き出し、自然物を使って遊びを想像し、実現できるように活動を展開した。また、活動の際に景色に目を向ける工夫を行い、普段とは違う視点で自然を見るきっかけを与えた。

家族内交流



<ゆとりのある時間設定>

活動時間と自由時間をはっきりさせ、適時スタッフから動きのアナウンスを入れることによって、子供たち自身が見通しを持って活動に取り組めるような関わりを行った。

<親子で協力できる場面設定>

ブランコやターザンロープなど幼児一人では難しい遊びや、グルーガンを家族ごとに使うなど、親子で協力できる活動や場面設定を行った。

集団生活



<子供の変化や考え方に親が気づける場面設定>

幼児の社会的スキル尺度調査に関して意図開きを行い、親子での宿泊を通して子供の姿を改めて見直すきっかけとした。親子で褒め合う場面を設定するなど、家族が関わる場面を設定した。また、子育てファミリーキャンプでは保護者が記入する事業後アンケートにて、子供の姿を振り返る項目を設けた。

<子供たちの役割を作る工夫>

資料や活動の道具の配布や準備、片付けを子供たちの役割として位置付け、活動の折に子供たちが動くことを想定した配布や準備を実施した。また、準備や片付け等を主体的に取り組むことができるよう、準備や片付けの際場所を指定するなど、お手伝いを促すスタッフからの声掛けを実施した。

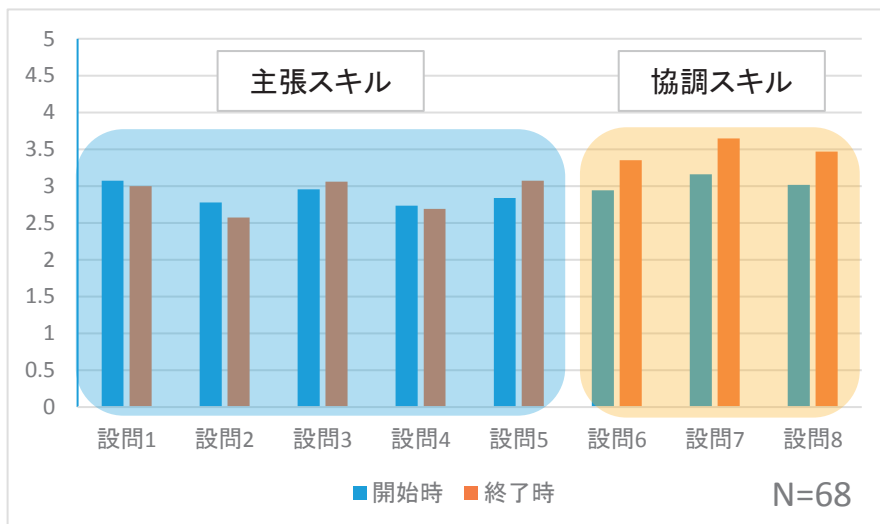
4 調査結果・考察

(1) 「幼児の社会的スキル尺度」の結果

事業の開始時と終了時の2回、「幼児の社会的スキル尺度」調査を実施した。「主張スキル」「協調スキル」に関する8項目の質問を、「5…非常によくみられる 4…よくみられる 3…ときどきみられる 2…少しみられる 1…まったくみられない」の5段階評定で保護者が回答した。

観点	設問	質問項目	開始時			終了時			t 値
			平均値	標準偏差	観点別平均値	平均値	標準偏差	観点別平均値	
主張スキル	1	自分から仲間（友達）との会話を話しかける	3.1	1.2	2.9	3.0	1.2	2.9	1.17
	2	仲間（友達）をいろいろな活動にさそう	2.8	1.2		2.6	1.1		1.80
	3	不公平なルールには適切なやり方で疑問を唱える	3.0	1.1		3.1	1.1		1.33
	4	簡単に仲間（友達）をつくる	2.7	1.1		2.7	1.2		0.68
	5	不公平な扱いを受けたと感じたら保育者（保育士、保護者等）にそのことをうまく話す	2.8	1.1		3.1	1.1		2.61*
協調スキル	6	言われなくても保育者（保育士、保護者等）の手伝いをする	2.9	1.1	3.0	3.4	1.1	3.5	3.33**
	7	活動に自分から進んで参加する	3.2	1.0		3.6	1.2		4.83**
	8	園（家や公共施設等）にある遊具や教材を片づける	3.0	1.0		3.5	1.1		3.96**

* $p < .05$ ** $p < .01$



※出典「心理測定尺度集Ⅳ」幼児の社会的スキル尺度より一部変更

(2) 事業評価アンケート(保護者記入)による自由記述抜粋

自然体験 「自然の中での遊び、自然を使った遊びを体験できた」「五感を目一杯使って楽しめました」
「山に落ちている松ぼっくりやどんぐりがかわいいオブジェになってよかった」

家族内交流 「時間的にも少し余裕があり小さい子もいるとちょうどよいスケジュールだった」
「家族で活動することや、慌ただしい日々を忘れて楽しめたので心が穏やかになった」
「子供たち、家族とゆっくり過ごせたのでとても良い機会でした」

集団生活 「一人っ子なので、他人と触れ合う機会がどうしても少ないのでこれからもこのような事業に参加してみたいと思う」「普段の生活と離れて園とは違う場所、人の中で過ごす体験はこの幼児期にとっても貴重な時間だと思います」

(3) 考察

「幼児の社会的スキル尺度」について、設問ごとに事業前と事業後の平均値を、t検定を用いて比較した。

主張スキル（設問1～4）に関しては、新型コロナウイルス感染症の配慮から家族単位での活動にしたことや、参加者は他家族との積極的な関わりを避け活動していたため、平均値にあまり変化が見られなかったと考えられる。その一方で、主張スキル（設問5）については、事業前後で5%水準の有意差が見られ、保育者に対して自らの想いを主張することができるようになったことがうかがえる。

協調スキル（設問6～8）は1%水準で有意な向上が見られた。準備や片付けを子供たちが主体的に行えるように展開したプログラムの工夫やコロナ禍で他の家族との交流は少なかったものの、家族ごとの活動に子供たちが主体的に取り組むことによって、協調スキルが向上したと考えられる。

自然体験については、子供たちの意欲・関心を引き、身近な自然を用いて想像・創造した活動、子供たちがやる気になる声かけなどにより、事業評価アンケートでの「山に落ちている松ぼっくりやどんぐりがかわいいオブジェになってよかった」という記述や、子供たちの五感を使って遊ぶ様子につながったと考えられる。

家族内交流については、家族毎の活動とし、通常想定される活動の時間をより多めに取るなどゆとりのある活動の配慮を行ったことが、事業評価アンケートで「子供たち、家族とゆっくり過ごせたのでとても良い機会でした」という記述につながったと考えられる。親子で協力してグルーガンを使ってクラフトを作ったり、「こどもの森」の中を親子で遊んだりした活動の中で、親や職員が子供を褒めることで、子供たちはより積極的に活動に参加するようになったと考えられる。

集団生活については、子供たちが自主的に動く工夫や、「幼児の社会的スキル尺度」による意図開きを行うことなどをとおして、親が子供の社会性に気づく場面が多くあったと考えられる。

5 成果と課題

(1) 成果

- ・積極的に五感を使って自然に親しむ姿が見られ、自然体験活動への興味・関心が高まったと感じられた。
- ・保護者からは、身近な自然や自然体験を見直したと言った肯定的な意見が多く見られた。
- ・家族でゆったりと過ごし親子で向き合うことについては、家族単位での活動を行ったことで、家族内で話をする場面が多く見られた。親子で協力して活動する中で、親から褒められる場面が多く生まれ、子供の自己肯定感が高まったと感じられた。
- ・社会性の育成に関しては、活動への積極性を高める仕掛けを行うことで、子供たちが活動の中で自主的に手伝いを行う姿が多く見られた。幼児の社会的スキル尺度、特に協調スキルが育まれた要因の一つと考えられる。

(2) 課題

- ・今回のプログラム展開では、社会性、中でも協調スキルの向上という点が成果として確認できた。今後は様々なアプローチから事業を展開し、子供の成長や身につく力を見る必要がある。
- ・幼児期における自然体験活動の意義を踏まえながら、様々な角度から目的を設定し、幼児を含めた家族事業や幼児だけの事業など目的に合わせた事業を企画していく必要がある。



森のほいくえん

1 事業の概要・目的

(1) 概要

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、教育事業「幼児キャンプ」は中止とした。そのため、今年度は、研修支援事業「森のほいくえん」についてまとめることとした。

妙高市では、第Ⅳ期妙高市総合教育基本計画において「自然や他者との関わりによる質の高い幼児教育の推進」が示され、豊かな人間性や郷土愛を育むことを目指し、国立妙高青少年自然の家、地域の里山やその他の自然を活かした体験活動、また地域の人材を生かした多様な活動などの「ほんもの教育」が推進されている。

これらを踏まえ、国立妙高青少年自然の家では、妙高市内の11保育園等の利用を積極的に受け入れ、1年を通じて多様な自然体験プログラム「森のほいくえん」を提供している。また、要望に応じて施設職員による活動支援（保育士と協働でプログラムを運営する）を行っている。

(2) 目的

- 年間を通して、多様な自然体験プログラムを経験することで、
- ・自然への気付きや親しみをもち、自然事象への関心を高める。(豊かな自然体験の推進)
- ・自分なりに考えて自分の力でやってみようとする態度を育む。(青少年の自立)
- ・戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを感じ、進んで体を動かそうとする意欲を育む。
(健康な心と体、幼児期に身に付けたい36の動き)

(3) 対象

妙高保育園	6月16日(火) 37名、7月20日(月) 35名、9月10日(木) 13名、10月16日(金) 37名、2月10日(水) 16名
ときわ保育園	6月9日(火) 39名、9月1日(火) 40名、11月12日(木) 40名、1月25日(月) 39名
さくらこども園	7月21日(火) 28名、1月27日(水) 27名
よつばこども園	7月31日(金) 41名
第三保育園	7月28日(火) 14名、2月2日(火) 28名
ひまわり保育園	7月28日(火) 19名、10月7日(水) 18名、2月18日(木) 19名
矢代保育園	7月22日(水) 14名、2月26日(金) 14名
斐太北保育園	7月30日(木) 31名、1月28日(木) 9名
妙高高原こども園	7月29日(水) 14名、1月28日(木) 13名
和田にじいろこども園	7月15日(水) 26名
斐太南保育園	7月15日(水) 26名

2 活動内容

時間	10:00	10:15	11:30	13:00
内容	到着 身支度	自然体験プログラムの実施 春：森遊び、藤巻山登山 夏：源流探険 秋：森遊び、藤巻山登山 冬：深雪体験、スノーシューハイク、そり遊び		着替え 昼食
				出発

3 体験活動の展開とポイント

活動支援にあたり、自然の家職員の役割は、隊長的な存在としてふるまう森の先生、いっしょに遊ぶお兄さん、何でも知っている森の博士、先導する道案内人など、園のニーズに合わせて設定している。また、園のめあてを優先するのか、園児の自然物に対する突発的な興味関心を優先するのか、そのウエイトについても、園との事前打合せにて確認している。

園との事前打合せ

- ・活動のねらいや要望を聞く。
- ・活動場所の決定。
- ・スケジュールの確認。



保育士と実地踏査

- ・到着してからの動線を確認しながら、活動場所の実地踏査に同行する。
- ・予想されるリスク、危険箇所の確認。



当日

- ・到着前にフィールドの確認を行う。
- ・始めの挨拶、めあての共有、セーフティトーク。
- ・活動を支援する。
- ・活動の振り返り、終わりの挨拶。



4 調査結果と考察

保育士の声や園児らの変容を調査し、年間を通して自然体験プログラムを経験する「森のほいくえん」事業や施設職員による活動支援体制に対する反応についてまとめ、自然体験プログラムがもつ魅力・効果について考察したい。

○保育士の声や園児らの変容

枝を集める子、地面を掘り続ける子、虫をずっと追っている子など、その子なりの「楽しみ方」を見つけられる場である。

施設職員のセーフティトークや安全管理が若い保育士らの学びの場となっている。

その子なりの「やれた！」がある。「また行きたい！」という意欲につながっている。

園で見られない好奇心旺盛な姿や活発な行動に驚かされる。

園でも、あきらめずに頑張ろうとする姿が多く見られるようになった。

自然の家での活動が単発の行事ではなく、年間を通じての継続した学びの場と位置付けられるのが良い。

日常においても、園児同士の会話に話題として出てくる。自然の家が楽しみな場所となっている。

○自然体験プログラムがもつ魅力・効果

- (1) 森遊びでは木に登ったり、茂みの中を探検したり、落ちている枝で基地を作ったり、葉や木の実を集めたりと活動の選択肢が多いため、園児の興味関心に応じた活動ができる。また、「次はこの高さまで登ってみよう」「立って渡れるかな」等、個々に合った難易度の動きを促すことができる。こういった支援が、園児の活動を能動的なものにするとともに、活動に対する期待（楽しみ）や意欲、挑戦心の高まりにつながった。



- (2) 目の高さにある枝の剪定や、かぶれを引き起こすウルシの除去、木の周囲にある倒木をよけておく等、直前のフィールド確認に加え、日常的に園児の活動をイメージした整備を行っている。完全な整地ではなく、程よい険しさを意図的に残すことで、安全を保ちながら、様々な動きに親しめるようにしている。こういった工夫の結果、園児たちは体を動かす楽しさや心地よさを感じられるようになり、行動が活発になった。



安心して多様な動きに親しめる





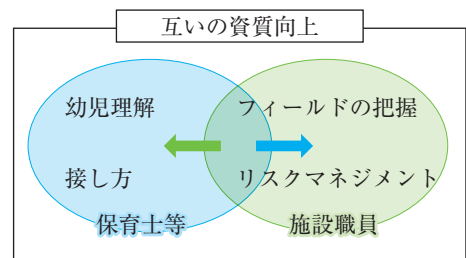
(3) 草花、実、虫、動物などの自然物に触れる楽しさを園児が経験できるよう、フィールドおよび行き帰りのルートで出会う昆虫や生物、動物の足跡やフンなどが残る場所を予め予測したり、確認したりしている。また、「何のフンだろうね」「なんでこんなところに隠れているんだろうね」「カエルのお腹に模様があるね」等、園児たちと一緒に「なぜ」を考えるようにしている。これらが園児の好奇心旺盛な姿を引き出した。



5 成果と課題

(1) 成果

- ・国立妙高青少年自然の家は、園児にとって、行くのが楽しみな場所となっている。また「森のほいくえん」は保育によって育みたい資質や能力を身につけるための活動の一つとなっている。
- ・施設職員との触れ合いや交流は、「親しみをもって人と関わる力」を身につける場にもなっている。
- ・幼児理解などの専門性に長けた保育士と、フィールドを熟知し、学びのリスクを管理する施設職員との支援体制が、園児たちの豊かな自然の中での学びを可能にしている。また、互いの資質向上の場にもなっている。



(2) 課題

- ・事前打合せと活動支援を行う職員が必ずしも同じでなかったり、毎回の活動支援を同じ職員が担当できなかったりするケースが多く、園のねらいや要望を加味した活動支援や継続的な見取りができないことがある。
- ・企画指導専門職5名を中心に、事業推進専門職とプロパー各1名の計7名が活動支援に入り、保育士とともに活動した。施設職員にとって、他の日常業務を行いながらの支援となるため、業務量過多等の課題が生じている。
- ・妙高市の教育課題*をみると、豊かな自然環境をもつ社会教育施設として、役割を十分に果たしているとは言えない。今後も市内保育園等との協働を含め、地域の教育力向上に少しでも貢献できるように取り組んでいく必要がある。

※妙高市の子供を取り巻く現状と課題として、意図的・計画的に自然体験や栽培活動を取り入れたり、いろいろな人と関わりをもたせながら社会とのつながりを意識させたりすることが十分とは言えず、特に「10の姿」の中の「自然との関わりや生命尊重」、「豊かな感性と表現」、「社会生活との関わり」といった項目について、より深く追求していく必要があると示されている。(妙高市総合教育基本計画第2章1(2))



国立立山青少年自然の家

National Tateyama Youth Outdoor Learning Center

幼児キャンプ やんちゃキッズの大冒険!!

1 事業の概要・目的

(1) 概要

国立青少年教育振興機構では、幼児期の生活習慣の確立や体験活動の機会と場を提供することを推進している。当施設では、幼児キャンプを過去10年以上実施しており、幼児期におけるより多くの体験・経験が子供たちの成長に寄与していることをこれまでの調査で実証してきた。今年度は夏に年長児の3泊4日、秋に年中児の1泊2日のキャンプを企画し、各キャンプで「テーマ」を決め、自立や協力、人間関係能力を育むことを期待して実践した。

(2) 目的

○キャンプのテーマ

夏：①自分のことは自分でする ②お友達と力を合わせる ③いっぱい遊んで、いっぱいお話しする
 秋：①自分でできることは自分でする ②お友達と仲良く遊ぶ

キャンプのテーマは、子供たちに約束として提示し、このテーマを意識して過ごせるようにした。そのため、スタッフには子供たちを見守るということを大切にして、子供たち同士の関わりが深まるよう、言葉掛けや指示の仕方等支援の在り方について事前に共通理解を図った。特に生活体験（荷物の準備・片づけ、歯磨き、布団の準備等）は、キャンプ後の家庭生活で、自分で行うことが習慣となるように支援した。

(3) 対象

夏：年長児 18名（男子9名、女子9名）【6名×3班】

秋：年中児 14名（男子8名、女子6名）

【5名×2班、4名1班】

※新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため富山県内の幼児に限って募集した。



2 活動内容

○夏キャンプ(3泊4日)

	午前	午後	夜
8月19日(水) (1日目)		はじまりの会 班旗作り・シュラフ準備・入浴	野外炊事(夕食) 班タイム
8月20日(木) (2日目)	野外炊事(朝食) 来拝山登山	昼食(手作りおにぎり弁当) 入浴	野外炊事(夕食) 班タイム
8月21日(金) (3日目)	野外炊事(朝食) 探検ゲーム	昼食(流しそうめん) 沢遊び・入浴	野外炊事(夕食) キャンプファイヤー
8月22日(土) (4日目)	野外炊事(朝食) 荷物片づけ 自由遊び	昼食(配給食) おわりの会	



○秋キャンプ(1泊2日)

	午前	午後	夜
10月10日(土) (1日目)	はじまりの会 自由タイム・寝床準備	昼食(配給食) 探検ゲーム	野外炊事(夕食)・入浴 班タイム
10月11日(日) (2日目)	朝食(配給食) 大丸山登山	昼食(配給食) おわりの会	

【事前保護者説明会】各キャンプで実施

事前保護者説明会は、キャンプ参加の子供たちが班のスタッフや仲間と会い、泊まる場所や活動する場所を知っておくことでよりキャンプに参加しやすい雰囲気を作ること、さらに、保護者がキャンプについて疑問に思う点、不安な点等を解消し、安心して子供を参加させてもらうことを目的として実施した。子供たちは、初めは緊張していたが、屋外で班の仲間と遊ぶことで表情が和らいでいった。保護者に対しては、活動内容や持ち物に加え、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策について説明を行い、キャンプに対する理解を得ることができた。



3 体験活動の展開とポイント

キャンプ前にスタッフ・ボランティアリーダーに対して「ねらい」の共有や、子供たち同士の関わりが深まるよう、言葉掛けや指示の仕方等支援の在り方について共通理解を図った。

- ①生活 ・「自分のことは自分でやる」リーダーは『待つ』という姿勢で臨む。
・着替え、片づけ、歯磨きなど生活習慣を繰り返す行う。
- ②食事 ・食事では、片づける、机を拭く等自分たちの使った物、場所をきれいにする等を自分で行う。
・自分たちで調理をする。包丁を使ったり、野菜をちぎったりして食事のお手伝いをする。
- ③活動 ・外での活動を主とし、子供たち同士で協力して解決するゲームや、森の探検など、自然を感じながら実施できる活動を取り入れる。また、自由時間や班タイムでは子供たちが一緒に遊べる時間を多く設けるようにし、遊びの発展を期待する。

～自分で「できた」を感じたり、楽しかったこと話したりする時間を設ける～

キャンプでは、子供たちに「カード」を渡し、夜の班タイムで自分自身を評価する時間を設けたり、自分の言葉で「楽しかったこと」や「頑張ったこと」を話す時間を設けたりして、自分自身の成長を感じられるような工夫をした。

〈秋キャンプに参加したM子のエピソード〉

班タイムでは、恥ずかしくて自分の言葉で言えなかったが、最終日のおわりの会で、全員の前で楽しかったことを言うことができた。



4 調査結果・考察

◎夏キャンプ

『保護者の事前事後アンケート』

事前保護者説明会時と、事業終了後1ヵ月後に、保護者に対して子供たちのキャンプ後の変容についてアンケートを実施した。アンケート項目は、20項目の質問とし、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階評定とした。回答があった18名のデータをt検定にて分析した結果が以下の通りである。

【キャンプ前後に大きく変化が表れた項目】

項 目	キャンプ前		キャンプ後		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
家の手伝いをする【協力】	3.28	0.58	3.56	0.62	2.56 *
自分がやるべきことを自分で考えて決めることができる【自立】	2.72	0.57	3.11	0.76	2.12 *
自分から進んでほかの子に声をかけることができる【意思伝達】	3.17	0.71	3.61	0.50	2.68 *
虫などの生き物を嫌がらない【自然理解】	3.00	0.97	3.39	0.78	3.29 **

※アンケートは国立立山青少年自然の家が作成

* p<.05 ** p<.01

「家の手伝いをする」「自分がやるべきことを自分で考えて決めることができる」「自分から進んでほかの子に声をかけることができる」では、5%水準で、「虫などの生き物を嫌がらない」では1%水準で有意な向上が見られた。お手伝いについては、キャンプ中も野外炊事を主に活動したり、洗い物や片づけも継続して行ったため、変化が表れたと感じる。キャンプを通して自分のことは自分ですることも意識した部分が、家庭生活でも継続されていた。また、屋外の活動が多く、様々な生物（虫）を見たことで、環境に慣れたことも伺える。



『保護者からの自由記述より子供たちの具体的な変化』

(1) キャンプの約束①「自分のことは自分でする」

- ・入浴や食事、着替えの準備を自分でするようになった。
- ・入浴時の洗髪や体を自分で洗えるようになった。
- ・食後に皿を片づけたり、着替えの準備をするようになったのと合わせて誰かがしてくれたことに「ありがとう」と感謝を伝えられるようになった。
- ・集中力が高まったように感じる。今までは、すぐに嫌になったり、途中で諦めたりすることもあったが、長く時間がかかってもするようになった。
- ・「自分のことは自分でする」と合言葉のように言うようになった。



(2) キャンプの約束②「お友達と力を合わせる」

- ・野菜を切ることを率先してお手伝いしてくれるようになった。
- ・弟や妹のお世話をするようになった。
- ・家族の分のお皿やお箸を食卓に並べるお手伝いをしてくれるようになった。



(3) キャンプの約束③「いっぱい遊んで、いっぱいお話しする」

- ・保育園であったことを以前より聞かせてくれるようになった。
- ・初めて会ったお友達ともすぐに打ち解け、親と一緒にいなくても仲良く遊んでいました。
- ・大きな声で「おはよう」と言ってくれたり、帰った時に笑顔で「おかえり」と声をかけてくれたりするようになった。



◎秋キャンプ

『活動中の子供の変化』※班リーダーの観察から

班リーダーが、1日の子供たちの言動について観察をし、夜のミーティング時に情報を共有した。特に、行動などで気になる子や、注意が必要な子を中心に見て、その子供の変化について考察した。

楽しいことが大好きなA君。最初の頃は、楽しすぎて自己中心的な行動が多く見られたり、班のリーダーにくっついていたりしていたが、1日目の夕食作りから班の男の子と一緒に遊び、自分から話しかけていた。2日目は、友達の気持ちを考えて行動する姿が見られた。



事前説明会ではお母さんから離れられず、キャンプの出発時も泣いていたG君。

1日目の自由タイムには、班の友達と一緒に遊ぶ姿が見られたが、発言も少なく、夜の班タイムでも自分の言葉で楽しかったことを言えなかった。2日目の朝も泣いていたが、朝食では嫌いな野菜も頑張って食べ、少しずつ打ち解けていった。最後の班タイムでは、小声ではあったが、自分の言葉で楽しかったことを言うことができた。

『保護者からの自由記述より子供たちの具体的な姿』

(1) キャンプの約束①「自分でできることは自分です」

- ・ 保育園の準備を「自分のことは自分です」と言いながらしています。
- ・ お風呂に入る時、脱いだ洋服を畳んだり、自分で洗濯機に入れたりするようになり、体や頭を自分で洗えるようになった。
- ・ 食事の準備を手伝ってくれるようになった。また、テーブルを拭いたり、食べたお皿を片づけたりしてくれるようになった。



(2) キャンプの約束②「お友達と仲良く遊ぶ」

- ・ 公園などで自分より小さい子を見つけた時に、ブランコを押してあげたり、危ない所では手を繋いであげたりして助けようとしている姿に驚きました。
- ・ 兄弟で喧嘩をした時に、「ごめんなさい」ときちんと謝ることができた。
- ・ 今まででは、保育園で1人遊ぶことが多かったが、キャンプ後は友達と一緒に遊ぶようになってきたと保育園の先生から言われました。
- ・ 以前は兄弟で物の取り合い等があり喧嘩をしていましたが、ゆずってあげるという姿が増えました。妹の面倒も見られるようになりました。



5 成果・課題

(1) 成果

- ・ 2つのキャンプでは、今まで以上に班タイム（できたことを話す時間）を重視した。その効果として、翌日に自分から進んで行動できる姿が見られる子供が多く見られた。カードを使ってできたことを見えるようにしたことで、子供たちの意欲向上にも繋がったと考えられる。また、年中児（令和元年度調査）と今回調査をした年長児共に、「家の手伝いをする」が5%水準で有意な向上が見られた。幼児期において、「できる」「できた」を体感することが大事であると認識できた。
- ・ 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、1日2回の検温、手洗い・うがい、手指の消毒を徹底した。特に体調を崩す子供もいなく活動ができたため、感染症対策という観点だけでなく、健康管理という面で継続していくことが望ましい。



(2) 課題

- ・ 今回のキャンプはボランティア養成セミナーの実施が遅れたこともあり、2年生以上の経験あるボランティアでキャンプを構成した。ボランティアの育成は大きなテーマであるため、次年度の幼児キャンプに繋がるように「育成ビジョン」を立てていく必要がある。

しぜんはともだち - 海編 -

1 事業の概要・目的

(1) 概要

国立若狭湾青少年自然の家では、近隣の3市町とそれぞれ異なるアプローチから連携し、各市町全園の年長児が参加する、幼児期の海や山の体験活動を実施している。(なお今年度は、3市町のうち高浜町については、新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し、実施を見送った。)

<小浜市>若狭地域の自然や歴史、文化を生かした体験活動を推進する取り組みを行っている。その一環として、小浜市の公立、私立の保育園、幼稚園、認定こども園等、全13園の年長児を対象とした「わかさわん しぜんはともだち」を実施している。海の体験に加え、山での体験、各園の地域での自然体験と年間3回の事業を行っている。

<若狭町>若狭町では、地域の豊かな自然を積極的に保育に取り入れているが、普段の保育の中に、若狭地域の自然の特色でもある海も加えてもらうことをねらいとして、事業を展開している。若狭町の公立、私立全9園の年長児を対象に実施している。

(2) 目的

- ・自然体験を通して、幼児に自然とふれあう楽しさや面白さを知らせる。
- ・若狭湾の海で遊ぶことで、より海を身近なものと感じられるようにする。
- ・普段の保育に、海や自然とのふれあいをより取り入れるきっかけとなるようにする。



(3) 対象

小浜市内の各園（13施設246名）、若狭町内の各園（9施設141名）の保育園、幼稚園、認定こども園の年長児

2 活動内容（海編）

小浜市 令和2年7月10日（金）、8月24日（月）、8月27日（木）、8月28日（金）

若狭町 令和2年8月25日（火）、8月26日（水）

（1日の活動人数は、70人程度）

「海の活動」<小浜市>

	9:00	10:00	12:00	13:00	14:30
園出発	自然の家着	はじめの会 【海の活動】 ・水遊び ・磯遊び ・磯観察 等	昼食 【持参弁当】	【海の活動】 ・水遊び ・磯遊び ・磯観察 等	自然の家発 おわりの会 （各園へ）

「海の活動」<若狭町>

	9:00	10:00	12:50	14:00	14:30
園出発	自然の家着	はじめの会 【海の活動】 ・水遊び ・磯遊び ・磯観察 等	昼食 【軽食】	休憩	自然の家発 おわりの会 （各園へ）



3 体験活動の展開とポイント

〈園児たちの自主性を大切に活動〉

- ・海や砂浜での遊び方については、園児たちがしたい遊びを自由に行わせる。
- ・園児たちには、活動内容についての指示は行わない。
- ・園ごとに担当職員をつけて、活動の支援を行う。



〈海でのライフジャケットを使った活動の展開〉

- ・海に入る前に、先生やスタッフが協力して、ライフジャケットを全員に着用させる。
- ・ライフジャケットを着ていると体が浮いて沈まないことを、海の浅いところで体験する。
- ・決められた海の範囲を自由に泳いだり、砂浜で遊んだりする。
- ・飛び込み台やエアアロープなどを目標にして、深い海でも怖がらないで泳いでいく。
- ・飛び込み台によじ登り、飛び込み台から飛び込む。



4 調査結果・考察

(1) 子供の変化を確認するために

小浜市と若狭町それぞれの海の活動が子供たちにどのような影響を与えるかについて、以下の2つの調査を実施し、分析・考察した。

① 「学びに向かう力」調査

各園の15%にあたる園児の保護者に、事業前と事業後の園児の「学びに向かう力」の変化についてアンケートを実施した。国立若狭湾青少年自然の家で独自に作成した「学びに向かう力」調査のうち、「好奇心」、「協調性」、「自己主張」の3因子から2つずつ、「自己抑制」、「がんばる力」の2因子から3つずつ、計12個の項目を設定し、「よくあてはまる」から「ほとんどない」までの4段階で回答を求め、事業前後の平均値をt検定を用いて比較した。

② 当日の見取りや体験後の変容

担任の保育士に、海活動中の子供たちの様子（発言、行動、表情など）について、印象的だと感じられた場面やエピソードについて自由記述で回答を求めた。

また、若狭湾での体験前と体験後で、保育園での様子について、変わったと感じたところや、普段の園での生活につながっていると感じることもあるか同様に回答を求めた。



(2)分析結果の詳細

小浜市の「学びに向かう力」の調査

園児 39 名の保護者への事前事後のアンケート結果から、「好奇心」では 1%、「がんばる力」は 5% 水準で有意な向上が見られた。

さらに、特に有意差が見られた因子の下位指標では、好奇心「新しいことにチャレンジしている」、がんばる力「自信をもって取り組んでいる」において、1% 水準で有意な向上が見られた。



上位指標	事前調査		事後調査		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
好奇心	6.69	1.13	7.15	0.99	2.75**
協調性	6.64	1.25	6.72	1.05	0.37
自己主張	7.03	1.09	7.00	1.28	0.16
自己抑制	9.00	1.70	9.23	1.48	0.98
がんばる力	8.26	2.20	8.90	1.73	2.34*

* p<.05 ** p<.01

下位指標	事前調査		事後調査		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
新しいことにチャレンジ (好奇心)	3.05	0.92	3.49	0.68	3.19**
自信を持って取り組む (がんばる力)	2.62	0.78	3.00	0.73	3.79**

** p<.01

小浜市の保育士による当日の見取りや体験前後のつながりと思える子供の様子

捕った生き物をたらいに入れておくことで、飽きることなくじっくりと見て楽しんでいました。

ヒトデがひっくり返った様子を初めて見る子が多く驚いていた。

ライフジャケットがあれば大丈夫という安心感でとても積極的に泳いでいた。



足元を泳ぐ魚たちを見つけては、「おった おった」と喜んでいました。日頃あまり見ることがなかったので園に戻って、みんなにも様子を嬉しそうに話していました。



海に入る時、「怖い」と身体が緊張していた子ども、慣れてくるといきいきとした表情になった。また、自分一人で飛び込み台までいき、飛び込み台からジャンプして飛び込んだ。短時間に自分自身で気持ちを強く持ち、チャレンジすることまで出来たことがすごかった。

水が得意でない子ども、躊躇なく海の中に入り、仰向けになって浮かんでみたり、海中をのぞいてみたりと積極的に遊ぶ姿が見られた。



プールで顔をつけるのを嫌がっていた子は、海も怖がると思ったが、率先して飛び込み台まで行き、飛び込みに挑戦していた。

海に入ること自体が、初めてという子どもいたが、友達やほかの園の子の様子を見て、海に入り、他の子の様子を見たり、肩まで海に入ることができたりして、心が動かされている。

好奇心

がんばる力

帰りの際に、「先生！明日も来たい！！」「僕も！」と言っていた。

小浜市は、海が近くにあっても、海の活動が初めての園児が多く、ライフジャケットの着用などで安心して活動できたことが貴重な体験につながっている。この体験が、園に戻ってから、自然のものに興味が深まったり、自然のものを集めたりする姿が増えたと考えられる。また、子供の生き生きとした表情が増えたという感想があった。

若狭町の「学びに向かう力」の調査

園児 23 名の保護者への事前事後のアンケート結果から、「協調性」「がんばる力」では 1%、「好奇心」は 5% 水準で有意な向上が見られた。

さらに、特に有意差が見られた因子の下位指標では、好奇心「集中して遊んでいる」、がんばる力「自信をもって取り組んでいる」において、1% 水準で有意な向上が見られた。



上位指標	事前調査		事後調査		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
好奇心	6.57	1.38	7.00	0.95	2.10*
協調性	6.61	1.37	7.09	1.04	2.71**
自己主張	6.57	1.50	6.83	1.34	0.84
自己抑制	8.48	1.73	8.91	1.76	1.55
がんばる力	7.78	1.95	8.74	2.00	3.45**
					* p<.05 ** p<.01

下位指標	事前調査		事後調査		t
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
集中して遊んでいる（好奇心）	3.43	0.66	3.74	0.45	3.10**
友達と協力している（協調性）	3.26	0.81	3.57	0.59	3.10**
自信を持って取り組む（がんばる力）	2.43	0.73	3.00	0.67	5.35**
					* p<.05 ** p<.01

若狭町の保育士による当日の見取りや体験前後のつながりと思える子供の様子

潜ると魚が見えた。捕まえたくて、ひたすら素潜りを繰り返していた。捕まえられず残念そうではあったが一生懸命楽しみ満足そうだった。

海の経験がない子がほとんどで、園でのプール遊びでも水への抵抗を感じている子がいたので、心配していたが、「友達と一緒に」というのが大きな力となり、緊張しながらも海の深いところまで進んでいた。「先生、行けたわ」と挑戦してできた嬉しさを伝えていた。



漁師の父親に海で見つけた生き物の話をしたり、魚の名前を教えて貰ったりと、より海の生き物に対して興味関心を持ち、詳しく知ろうとする姿が見られた。見た生き物を描き保育士や友達に説明する姿が見られた。

箱眼鏡で魚を探し、どうにかして触ろうと必死で追いかけていた。

一度飛び込んで怖さを知ったにも関わらず、再び挑戦しようとする姿が見られるようになった。



ライフジャケットを着けたことで、安心して海に入り、飛び込み台まで行けた。

水中をのぞくと、普段見られない海の様子に感動していた子供たち。サザエやウニなど、店に並んでいたりする姿を見たことはあっても、生きている状態で目にするのは初めてなので「本物や!」と驚いていた。こうして実体験を通して、感じると印象にも強く残る。

若狭町では、普段の保育から実際にいきものを採ったり触ったりしている。今回の海の体験が加わることで、園児の行動にさらなる好奇心が芽生え、園での生活でも、興味関心を持つ園児が増えたと考えられる。また、ごっこ遊びの中で、身近な素材を使って遊ぶことが見られた。

5 成果・課題

(1) 成果

- ・それぞれの市町が力を入れている教育方針の上に、若狭湾で海の体験活動が加わることによって、子供たちの「好奇心」や「がんばる力」といった「学びに向かう力」により影響が与えられたと考えられる。
- ・一連の活動を通して、「体を動かすことの楽しさ」、「自立心」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・尊重」など「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の育成につながった。特に、自信を持って取り組む（がんばる力）が両市町の園児に有意な向上が見られた。
- ・園と施設が、密に連絡を取り合い、ねらいや活動の展開を共有ができたことに加え、当日各園に職員が 1 人以上配置され、安心安全に活動が展開できた。

(2) 課題

来年度から、同事業の対象を敦賀市及びおおい町に拡大するにあたって、今後も事業を継続するために、施設の整備、職員の幼児理解を深めるための研修会を充実するなど、さらに効果的な支援の継続をする必要がある。



事業を終えて

今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大が世界的に大きな問題となり、現在もその影響が続いています。マスクの着用、密を避けた生活等、子供たちの生活も大きく変わりました。私たち中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設では、新型コロナウイルス感染症対策をしっかりと行った上で、安全安心な活動環境を整え、各施設がそれぞれの立地条件や特色を生かした事業に日々取り組んでいます。

本プロジェクトの研究テーマは、「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」であり、本年度が3年目の取組となります。幼児たちが豊かな自然環境の中で、仲間と一緒に、様々な体験活動を行うことは大きな意義があります。そして流れる沢水の冷たさや木々の匂い、冬はたくさん積もった雪の柔らかさなど、ホンモノの自然と触れることで、子供たちの感性が育まれます。幼児期の体験は、その人の生涯の基礎となるのではないのでしょうか。

中部・北陸ブロックの各施設は、海や山、森など、多様なフィールドでの幼児対象の自然体験活動をたくさん展開しています。その成果が今後、全国各地の実践に活用され、新たなプログラム開発、幼児の体験活動が更に推進され、数多くの青少年の自立に寄与することを心より願っております。

最後に、これまで本プロジェクトの事業運営や評価、研究手法のアドバイスなど、継続的に親身にご指導を頂きました信州大学理事・副学長 平野 吉直先生、筑波大学人間総合科学研究科教授 坂本 昭裕先生、信州大学教育学部講師 瀧 直也先生に心より感謝を申し上げます。

令和3年3月
 独立行政法人国立青少年教育振興機構
 中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局
 国立妙高青少年自然の家 主幹 友松 由実



令和2年度調査研究事業 幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立妙高青少年自然の家
 国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家

■発行日/令和3年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所

調査研究事業

「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」

幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

目的

幼児期における自然体験活動の効果的なプログラムや事業運営、子供たちとの関わり方指導法など、幼児期にふさわしい自然体験活動プログラムのあり方について検証する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

得ようとする成果

〈求める成果〉

- 幼児を対象とした体験活動プログラムや幼小接続を考えたプログラムの展開
- 量的・質的效果検証方法を活用して、幼児期における効果的な自然体験活動プログラム開発

成果の普及・活用

本研究により検証した幼児期における自然体験活動の実際や子供の変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構 中部・北陸ブロック5施設の教育事業並びに研修支援に生かすとともに、全国の国公立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる幼児期の体験活動について、プログラムや手法について具体的に示し成果の普及と活用を図る。

研究機関

- 国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト
- 国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家
- 国立妙高青少年自然の家・国立立山青少年自然の家
- 国立若狭湾青少年自然の家

研究期間

平成30年4月1日～令和3年3月31日

本調査研究事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

平成30年度からの幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（いずれも平成29年3月31日公示）の改訂（定）に伴い、幼児教育・保育において育みたい「資質・能力」の3つの柱と、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」が示された。全年齢期の体験活動を標榜する当機構においては幼児期の体験活動の重要性に着目し、自然環境の特性を活かしたプログラム展開を実施している。今まで既に様々な場所で実践されている幼児の自然体験活動において、より効果的なプログラムと展開につながるように成果をまとめプログラムや事業を実施し、広く成果を普及することは国の施策を具体化するナショナルセンターとして大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

過去10年にわたり積み上げてきた成果の上に、平成30年度からの3年間は、教育要領・指針等を踏まえ幼児期における効果的な体験活動のプログラム展開や効果に関して検証をしていく。今年度は各施設が実施した事業を量的・質的に検証を行い、次年度事業へとつなげていく。

指導者

- | | |
|-------------|------|
| 信州大学 理事・副学長 | 平野吉直 |
| 筑波大学 教授 | 坂本昭也 |
| 信州大学 講師 | 瀧直也 |

担当者

- | | |
|--------------|-------|
| <平成30年度> | |
| 国立能登青少年交流の家 | |
| 次長 | 松本 猛 |
| 主任企画指導専門職 | 布施 幸治 |
| 国立乗鞍青少年交流の家 | |
| 次長 | 山川 忠彦 |
| 企画指導専門職 | 北平 明美 |
| 国立妙高青少年自然の家 | |
| 次長 | 桑山 宗大 |
| 企画指導専門職 | 福上 英彦 |
| 国立立山青少年自然の家 | |
| 次長 | 岩間 一成 |
| 事業推進係主任 | 小泉 成滋 |
| 国立若狭湾青少年自然の家 | |
| 次長 | 奥村 広一 |
| 企画指導専門職 | 大江 勝次 |
| <令和元年度> | |
| 国立能登青少年交流の家 | |
| 次長 | 田中 利弘 |
| 主任企画指導専門職 | 釜谷 剛 |
| 国立乗鞍青少年交流の家 | |
| 次長 | 室井 修一 |
| 企画指導専門職 | 井川 拓哉 |
| 国立妙高青少年自然の家 | |
| 次長 | 森原 強史 |
| 事業推進専門職 | 齋藤 史晃 |
| 国立立山青少年自然の家 | |
| 次長 | 岩間 一成 |
| 事業推進係長 | 小泉 功一 |
| 企画指導専門職 | 松井 功一 |
| 国立若狭湾青少年自然の家 | |
| 次長 | 秋山 洋 |
| 企画指導専門職 | 伊藤 睦浩 |
| <令和2年度> | |
| 国立能登青少年交流の家 | |
| 次長 | 田中 利弘 |
| 主任企画指導専門職 | 堀田 俊宏 |
| 国立乗鞍青少年交流の家 | |
| 次長 | 室井 修一 |
| 企画指導専門職 | 坪内 笑子 |
| 国立妙高青少年自然の家 | |
| 次長 | 森原 強史 |
| 主幹 | 友松 由実 |
| 主任企画指導専門職 | 福上 英彦 |
| 国立立山青少年自然の家 | |
| 次長 | 岩間 一成 |
| 事業推進係長 | 小泉 成滋 |
| 国立若狭湾青少年自然の家 | |
| 次長 | 秋山 洋 |
| 企画指導専門職 | 伊藤 睦浩 |
| 事業係員 | 井石 伸洋 |



国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL.0767-22-3121 <https://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋(はくい)市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13
TEL.0577-31-1011 <https://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳(3,026m)の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL.0255-82-4321 <https://myoko.niye.go.jp/>

妙高戸隠連山国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1
TEL.076-481-1321 <https://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する国立立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜
TEL.0770-54-3100 <https://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭湾国定公園の中央にある田島半島の一角に位置する国立若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目の前に広がる専用ビーチを有し、そこでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



体験の風を
おこそう



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

■中部・北陸ブロック

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立妙高青少年自然の家
国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家